論 文 の 和 文 要 旨

論文題目　　ファム・コン・ティエン研究序説

氏名　　野平宗弘

ベトナム戦争の時代に現れた、南ベトナム出身の詩人、思想家であるファム・コン・ティエン Phạm Công Thiện (1941-)（以下、ティエンと略）は、日本ではこれまでほとんど無名で、また現在のベトナム国内でも議論されることはほとんどない。しかし、ベトナム戦争中の南ベトナムでは「ファム・コン・ティエン現象」という流行現象が起こるほど有名であり、彼の著作は人気を博した。１９６５年にアメリカでヘンリー・ミラーHenry Miller(1891-1980)に会った際には、ミラーに向かって「ぼくはあなたを殺す」と宣言し、ミラーからは「ランボーの生まれ変わり」と呼ばれている。彼は１９７０年にベトナムから失踪して以来、帰郷はしておらず、亡命者となって現在はアメリカに暮らしている。本論文ではティエンの人生、思想、創作を紹介し、難解な彼の思想の解明を目指した。

ティエンは、幼い頃からの膨大な量の読書を通じて、２０代半ばにはニーチェ Friedrich Wilhelm Nietzsche(1844-1900)とマルティン・ハイデガーMartin Heidegger(1889-1976)の影響のもとに、ベトナム戦争の根源を表象的思考である西洋形而上学と見定め、龍樹(150?-250?)の影響のもとに、一切の表象的言説の破壊に挑んだ。しかも彼の知識と人生は直結している。鈴木大拙(1870-1966)やヘンリー・ミラーの書物から、苦しみの極限にまで到ることでの自己解放を学び、言語が作り出した既存の妄念に囚われずに自由に生きることに目覚め、ほとんどありのままに彼は生きてきた。ティエンは人間にとっての言語なるものの本質に気付いていた。「人間は〈言語〉奴隷だ」という『太陽などありはしない』の最後の捨て台詞は、人間にとっての言語の本質を集約的に物語っている。

人間は、人間にとってのありのままの世界の他に言語世界を持っている。言語は歴史、法律、宗教、思想哲学などの言語世界を作り出す。西洋世界は、人間の言語が作り上げた理性的な論理によって、秩序立った理想郷を求め、地球全体を覆い尽くす近代世界を作り上げていった。しかし、ティエンは、理性や論理が構築してきた近代世界なるものが、「存在」忘却の歴史の中で成り立ったことをハイデガーを通じて知っていた。西洋語の中には今でもロゴスやピュシスといった言葉の名残

があるが、ソクラテス以前のギリシア思想家達が思想し名指した元来の言葉に含意されていたハイデガーの言う「存在」の「真理」を西洋形而上学は忘却し、人間の側から「存在者」を見、「存在者」は人間に見られ像として立たされ、言語的な知性と事象の合致という真理観がそれを支え、人間中心的な近代世界を作り上げていったのである。しかし、人間にとって都合のいい世界を作り上げたと思っていたものが、逆に人間を拘束し駆り立てることとなり、２０世紀には、「対象」を研究してきた科学技術は大量殺戮兵器どころかしまいには原爆を作り出して人類全体の滅亡の危機さえ生み出し、その人類滅亡の危機を逆に核の保有によって回避するという倒錯的な冷戦時代が始まり、東西イデオロギー間の衝突を代理する理なき殺戮破壊が、ティエンの生まれたベトナムにおいて起こったのである。ティエンにとっては、自由主義も資本主義も共産主義も、いずれもハイデガーの言う「存在」の「真理」を忘却した西洋形而上学のイデオロギー、すなわち初源のロゴスの経験を忘れたラティオが支えるイデアであった。ヘーゲル Georg Wilhelm Friedrich Hegel(1770-1831)の弁証法に対しては、ティエンは龍樹の「易化法」を対峙させた。ヘーゲルの弁証法の理念は現実的に人間が主体となって地球に君臨する全体を成就させたが、ティエンにとってみれば、それは「存在」を忘却した位相における人間中心的な思考であった。それに対して「易化法」は、人間の言語と思考が「実際」bhūta-koṭi の世界を掌握できないことを言語を通じて言語的命題を否定することで証明し、人間的理念の実現のための根拠として据え置かれていた言語の根拠性、正当性を挫く。「易化法」により、人間の言語による世界の実体的掌握支配を行おうとする西洋形而上学的思考を沈黙させることで、「深淵の沈黙」における「実際」的な「変易変化」して留まることのない世界へティエンは到ろうとした。

言葉は妄想を生み出し、人間はその妄想に縛られて苦しみながら生きている。ティエンにとって、本来自由な生を拘束するそのような言語的世界は、まず一度取り払ってしまわなければならないものだった。それが戦争の悲劇をベトナムにもたらした言語世界つまり西洋形而上学ならばなおさらであった。言語的妄想を取り払ってしまえば、人間は悩むこともなく自由になれる。ティエンは言語的分別が生み出す妄想に反逆し、ニーチェ的な無垢な幼児を称揚し、文字通り分別のない自由な生を生きようとし、臆することなくその生を言葉に記した。彼の挑発的で破壊的言動は、ニヒリズムなどではなく、ベトナム戦争の悲劇さえもたらしたイデオロギーの根源である言語的妄想を無効にするためのものであり、瑞々しい自由な生を奪還するためのものだった。

彼の範となったのは、禅的な生き方であり、ヘンリー・ミラーの生き方であった。ミラーは金も無く、資力も無く、希望も無く、何もかもが無くなった時に、つまりは言語的妄想が価値付けていたものが無く自由な生をさまたげるものが一切無に帰した時、突発的に「我有り」と叫んだ。それは考えた末に確実なものとして見出された西洋近代の「自我」の目覚めなどでは決してなく、言語的に無分節なカオス的世界が突然切り裂かれてた時の一切を挙げての初源的な「有り」であった。無に割れ目が入り有に転化するその瞬間の出来事を、ミラーなら混沌の子宮世界から生まれ出ることと言っていたかもしれないが、ティエンはミラーを象徴する Cunt という境界的で挑発的な言葉で名指し、ハイデガーの Sein という出来事と同じものだと言った。ハイデガーの言う Sein は、ソクラテス以前のギリシア思想家達がピュシスやアレーテイアやロゴス、雷電といった語で言い表した、言語的に無分節な闇に言語的分節線が入る時の無と有全体をあげての境界的出来事であった。既存の言語的妄想の一切を無にした時、そのような出来事が突然瞬間的に現れる。それは固着した言語的妄念に囚われない、無垢な初源的発現であり、生は生まれ出たことに歓喜し初めて意識された瑞々しい己の存在を叫び上げる。ティエンは、言語的に無分節なカオスとして隠れていた世界が一挙に発現するその電撃的な始まりの瞬間的出来事を「詩」とも呼び、その「詩」の発現をベトナムの禅

僧空路(?-1119)の叫びに見出した。ベトナム語の類別詞カイ cái が元来「母」という意味であったことにも注目し、人間の生物学的発生と重ね会わせ、カイ cái（母）とコン con（子）というベトナム人にとって最も身近なベトナム語で初源的発現を言い表してベトナム語そのものを思想化し、また仏母般若の智慧とも結びつけた。

瞬間的境界的出来事は、その有的側面の裏から見れば、言語的に無分節なカオス的無の充溢であり何の妨げもない流動である。それはミラーが生きた生の奔流であり、ハン・マック・トゥーHàn Mặc Tử(1912-1940)が生を断ち切るほどにまで生きて見出した「透明な源」であり、大乗仏教の「空」の世界、万行禅師(?-1025)の「身如電影有還無」、悟印禅師(1020-1088)の「妙性虚無」であった。あるいはグエン・ズーNguyễn Du(1765-1820)のようにひたすら忍耐して『金剛般若経』を千度も読み返し突然「無字」こそ「真経」であると目覚めた者もいた。かつてのベトナムには、万行や悟印、空路、あるいはグエン・ズーのように、「見性」し「実際」の世界に生きた者がいたのである。彼らの「実際」の世界は、人が物事を客体や対象として捕らえるような世界ではなく、流動的で充溢した無とそこに亀裂が入って気付く有との境界線上の世界全体を挙げての出来事である。ティエンは仏教で言われる「実際」bhūta-koṭi や「性」bhāva を梵語の語源√bhū まで遡り、ハイデガーの言う Sein（bin,bist）やギリシア語のピュシスと同じ語源に属する語であることを指摘し、ハイデガーの Sein を「性」、「性体」、「体性」と訳すことに語源的根拠を与えて、ベトナムに根付いていた大乗仏教の叡智と、そして「存在忘却」の西洋形而上学とは異なる初源的な西洋の叡智との√bhū が名指す出来事に基づく対話の可能性の地平も開いた。

人間にとってのありのままの生を拘束する慣習的で固定的な言語世界は一度取り払わなければならない。しかし、その一方で、言語は人間に世界を与える。ハイデガーは「語の中に、言葉の中に初めて物は生じ、また、ある Im Wort, in der Sprache werden und sind erst die Dinge」と言い、ティエンもその言葉を引用している。無分節な生の流れは母語によって分節される。人間は母語の言語体系の中に生まれ、母語の世界を生きる。ティエンにとって無分節な生の流れはチベット高峰の「透明な源」から流れ下ってアジアの「深淵」へと至るキュウロン河（メコン河）であり、その無分節な生の流れは、キュウロン河の河岸の水面から芽生え出る植物のように、生まれ故郷ミィトーの言葉、ベトナム語によって分節される。彼はベトナム語の中に初めて生じ、存在した。彼にとって「ベトナム民族」なるものは、ベトナム語の中に存在するものであった。しかし、今やベトナム全土が、「存在」すら忘却した西洋形而上学とその語彙に覆われ、母なる故郷のベトナムとベトナム語の根が失われようとしている。亡命者となり故郷喪失者となったティエンは、ベトナム語に傾聴し、ベトナム語の中に再び故郷を見出そうとする。だが、それはただベトナム語を話し執筆すればいいというわけではない。人間として世界に存在する限り言語的世界から逃れることはできないが、しかし、既存の言語世界とは異なる世界を人間は言語によって新たに創造することもできる。自由な詩人として生きる彼は、既存のベトナム語の用法や統辞法には拘束されず、凡庸なベトナム語の中にも神聖な輝きを見出し、ベトナム語の新たな表現の可能性を探求して、詩作を通じて瑞々しいベトナムを再び創造し、再び言葉としての故郷へと帰ろうとしているのである。